

ただ今、 道産子修行中!

まさごのりこ北海道魅力発見録

～その6～

～北海道のことば、
あずましく～

真砂 徳子

フリーアナウンサー



イラスト：真砂徳子

道産子は、手袋をはき、ゴミを投げる!?

果てしない大空と広い大地は、住んでいる人たちの行動をここまで大胆にさせるのか、と仰天もつかの間、そこは道産子修行の身。私だって「はいてみよう、投げてみよう」と密かに誓い周囲を観察、したのだが…「はく」は「はめる」、「投げる」は「捨てる」を意味する北海道の方言。そう、甚だ大胆な勘違いをしていたのは、新参者の私の方だったのだ!

そういえば、国語の授業で「方言」を学習したことはない。学んでいる日本語は、標準語と呼ばれ、明治時代、標準語の普及を目的に編纂された「国定読本」によれば、標準語は、東京の山の手地区で話されている言葉に基づいているようだ。また、話し手のバイブルとも言うべき「明解日本語アクセント辞典（三省堂）」には、動詞、形容詞、固有名詞など、6万語以上の標準語の発音の高低やアクセントの強弱が示されている。アナウンサーになり12年、この辞典は、私のアナウンスの指南書として、手放せないものとなっているが、取材で各地へ赴き、その地域独特の言い回しに接するたびに、アクセント辞典では学べない、暮らしの中に息づく方言の魅力と日本語の豊かさを実感するのである。

ところで、日本語は、「習得するには、日本の赤ん坊として生まれ、日本人の家族に育てられるしかない」と言われるほど、外国人にとって覚えにくい言語だという。英語に置き換えることができない日本独特の表現も多く、それが一層習得を困難にしているようだ。

例えば、「いただきます」「ごちそうさま」—私たち日本人にとっては当たり前の決まり文句が、外国には見当たらない。もともと「いただきます」は、中世以降の日本で、目上の人や神仏に捧げた料理を授かる際、自分の頭上「頂き（いただき）」に載せるような動作をしていたことが語源だと言われている。また、食事は、万物に宿る「命をいただく」という、日本ならではの思想が生きた表現という説もある。そして「ごちそうさま」は、「走り回る」を意味する「馳走」の前後に「御」と「様」をつけた言葉で、お客さまの食事の準備に走り回るほどのもてなしに対し、感謝と敬意を表しているのだそうだ。しかし、それぞれを何とか英語で表現すると「Looks delicious. (美味

しそうですね)」「I'm done. (食べ終わりました)」等となり、日本語の「いただきます」「ごちそうさま」本来の意味を伝えようとすれば、更に他の英語を駆使し補足せねばならないというわけなのだ。

ほんの短い言葉に込められた日本語の奥深さは「俳句」でもしかり。松尾芭蕉の「古池や 蛙飛び込む 水の音」日本人ならば、おそらく誰もが水墨画に描かれているような静寂な光景を思い浮かべるこの一句が、外国人には理解しづらいという。ある日本の言語学者が、この俳句の英訳(The ancient pond/A frog leaps in/The sound of the water)を、アメリカの学生に話したところ、「それが何？」という味気ない返答ばかり。どうやら「蛙が池に飛び込んで水の音がする」それがどうしたのか、どういう意味なのか、それが何故芸術なのか、ということらしい。しかも中には、蛙の群れがばしゃばしゃと池に飛び込むことを想像する外国人もいるそうで、思わず苦笑のエピソードに、異文化の伝達の難しさと言葉と風土の深い関わりを思い知るのである。

現在、世界には、およそ6000の言葉があるそうだが、インターネットなど通信技術の発達で、言葉の消滅を加速させ、100年後には300から600ほどに減ってしまうのでは、と懸念する学者もいるという。そんな中、かつて、イングランドの植民地であったアイルランドでは、衰退しつつあった独自の言葉・ゲール語を、伝統文化復活を目指す有志による「ゲーリック・リバイバル」という運動で復活させてきた。現在アイルランドの道路標識や公文書には、ゲール語と英語の両方が表示され、1996年には、国と民間の協力で放送局TG4も設立された。この放送局では、1日何時間かゲール語を放送し、ゲール語普及に努めているのである。

外国語はままならない私だが、ならば日本語は…？ アイルランドの試みに、本当に私は母国語を理解しているだろうか、と心配になった。

言葉が風土に根ざしたものと考えれば、各地の風土を反映した「方言」は、先人の精神が宿る大切な言葉。最近の日本では、その「方言」の真価が、地域のPRの場で、発揮されているという。

秋田県御勝町の『来てたんせ (来てください) 御勝町』、新潟県岩室村の『よりなれ (寄りな

い)！岩室』、山口県の『おいでませ (いらっしゃい、ようこそ) 山口』、宮古島の、『ずう～ずう～みゃ～くずまんかい (宮古島へ行きましょう)』など、各地のキャッチフレーズや観光ポスターに「方言」を見かけることがしばしばあるが、これまでもつばら話し言葉に使用されていた方言が、書き言葉で活躍し、まるで地元の人に話しかけられているような親しみとあたたかさがあると、観光客にも好評なのだそう。

「なんもさ (どういたしまして)」、「めんこい (かわいらしい)」、「あずましい (心が落ち着く、気持ちが良い)」など、ぬくもりを感じる方言は、北海道にも多い。「あずましい」は、漢字で「吾妻しい」と書くそう。「我が妻がそばにいるような」精神的な安堵感が、この言葉の由来と知り、更に、その響きはあずましく感じる。いつかは私もあずましくと…芳しい方言に想いを馳せる。「まいっしょ (まあ、いいか)」とは言わないぞ、と未来の行方を見守りながら…。



profile

真砂 徳子 まさこのりこ

フリーアナウンサー

埼玉県出身。明治大学文学部卒。新潟テレビ21アナウンサーを経て、北海道に移住。ニュース、バラエティ、情報・教養番組などテレビを中心に幅広く活躍。2005年独立し、真砂事務所を開設した。<http://www.masagonoriko.com/>